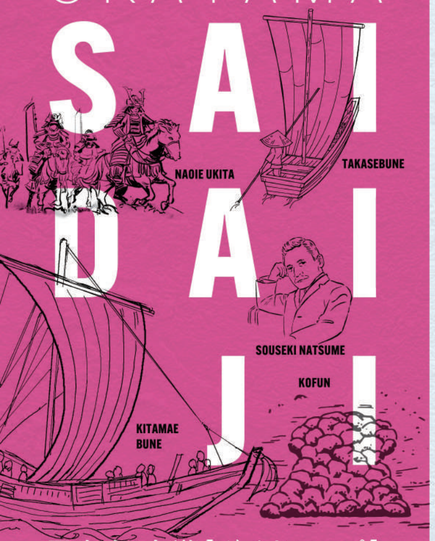
古代から現代まで
西大寺は
歴史の博物館

OKAYAMA SAIDAIJI



西大寺・上道［ガイドマップ］

発行 一般社団法人 西大寺活性化協議会
岡山市東区西大寺中3丁目6番15号 info@sd-machizukuri.jp

北前船ゆかりの地として繁栄した「岡山西大寺」

西大寺と北前船

西大寺は北前船や高瀬舟が寄港する交易の中心地として繁栄し、市場の喧騒、街の賑わいに活気が溢れていました。

江戸中期から明治の頃、西大寺の市場には、山間部からの薪や炭、高瀬舟で運ばれた米や特産品、さらには北前船でもたられる魚肥や昆布が集まり、大変な活況を呈していました。九蟠港には大小さまざまな買積船が集まり、幟が行き交う川面には商いの活気があふれ、市場では商人たちの取引の声が飛び交いました。陸上での輸送が未発達の頃、西大寺は水運で栄え、瀬戸内海でも名だたる経済拠点としての地位を確立していたのです。

発展の起爆剤は、間違いなく北前船の寄港にありました。"動く総合商社"たる北前船は、全国各地の寄港地に大きな経済的利益をもたらしましたが、西大寺もまた寄港地としてメリットを享受しました。なかでも、観音院近くで廻船問屋を営んだ「阿波徳事」ごと藤原徳太郎は、九蟠港を拠点とする彼の北前船を駆使して、瀬戸内から日本海を往復し、この地に多くの富をもたらしました。

また、九蟠港のみならず隣接する西大寺港にも、北前船寄港地として確かな痕跡が残されています。奇祭として知られる「西大寺会陽」には、北前船で財をなした兵庫の豪商・北風家が祝主を務めました。この北風家と取引関係にあった金岡湊の丸野幸吉郎もまた北前船との取引に深く関り、西大寺港も寄港地に組み込まれていたと思われます。河川港ではあるものの、物流の要衝として重要な役割を果たしていました。

吉井川水運の終点である西大寺、また北前船など外洋航路の寄港地である西大寺、まさに交通の結節点。当地はさらに「信仰」の交流拠点という要素を加えて、独自の地位を築きました。明治13年（1880年）の『山陽新報』には、厳寒の2月、西大寺会陽に集う群衆や、祝主・福男の様子が報じられていますが、港周辺には多数の北前船と高瀬舟が結集しました。そして、西大寺観音院に押し寄せた幾多の水主（乗組員）たちは、竜神様をお祀りするとともに、会陽に参加し、水垢離した体で懸命の「地押し」（地踏み）をすることで、荒ぶる神々を鎮め、航海の安全を祈りました。

【北前船】:井田家所蔵古写真・福井県立若狭歴史博物館提供

北前船は、江戸期から明治にかけて日本海・瀬戸内海航路を活用して商品を輸送した大型の帆船であり、単なる輸送手段ではなく、買積みによる自営商取引を行う商業的船舶でした。

美作と瀬戸内海を結ぶ金岡湊 A-4

江戸から明治にかけて、吉井川河口付近の湊は、高瀬舟の終着点として、美作地方と瀬戸内海をつなぐ河川港として栄えました。

金岡湊には、高瀬舟によって美作地方の米や和紙、茶などの地域産品が運び込まれ、雁木（がんぎ）と呼ばれる石段から荷の積み下ろしが行われていました。この地で問屋を営み、湊の物流を支えたのが、商人にして船主でもあった丸野幸吉郎です。幸吉郎は、大阪や兵庫方面に美作の米や特産品を運びました。

さらに注目すべきは、金岡村の船が西回り航路にも参加していたことです。山形県酒田市の鈴木家『御客船帳』には、備前国の北前船として福吉丸（金岡村）、栄久丸（同）、榮久丸（金岡湊）の寄港が記され、秋田県土崎湊の吉井家『客船帳』には、小倉屋平吉（金岡村）の名前が残されています。これらの記録は、金岡湊の船が大阪や兵庫津といった関西の都市だけでなく、日本海側を北上し、蝦夷地（北海道）までの長距離交易に関与していたことを裏づけています。

一方、西大寺観音院にある「西大寺会陽絵図」には、境内の石門横に大きな米蔵が描かれています。この米蔵には吉井川流域や美作地方から高瀬舟で運ばれてきた米が納められ、この米は同じ絵図に描かれた神勢丸（西大寺港、船名額が構成文化財）などの船によって兵庫津や大阪方面へと積み出されていました。

このように吉井川河口付近の湊は、それぞれが内陸と瀬戸内、日本海と蝦夷を結ぶ重要な物流結節点として、また船主や問屋といった地域の商人たちによって支えられ、地域の経済と文化の交流を担う中継地として栄えていたのです。

高瀬舟

物流機能として「高瀬舟」が活用された原点。北部の年貢米や特産品を積んで吉井川を下り、上りでは生活用品を積んだ高瀬舟を帆走や人が曳いて北上しました。吉井川では全長5m幅2m（乗員3～4名）の舟を使用し、津山・美作方面への上りは3～4日、西大寺までの下りは1～2日を要しました。

旧九蟠港常夜燈 A-5

吉井川の河口に位置するため、西大寺に向かう北前船の航行にも重要な役割を果たしました。岡山は瀬戸内海に沿って海岸線や島々が点在しており、近世由来の常夜燈が数多く残っています。旧九蟠港常夜燈は規模が大きく、花崗岩の切石だけで築造されており、備前の伝統的な石工の技術が伺えます。

高瀬舟をつないだ浜倉の榎 A-3

高瀬舟の船頭たちが船を着ける目印にした浜倉の榎。左はおよそ110年以上前の写真ですが、女性達に対して榎の窪みの位置が低い。現在の写真では窪みは軽トラの屋根の高さほどに成長、いかに榎が伸びたかが分かります。

歴史を感じる神社仏閣が多く点在

西大寺観音院 A-3

この寺院の正式名称は、高野山真言宗別格本山金陵山西大寺です。毎年2月に行われる会陽（えよう、裸祭り）が有名です。創建は寺伝によると天平勝宝3年（751年）で、西大寺の街は、観音院を中心に門前町として発展しました。

武運の神・窪八幡宮 B-3

古来より、武運・勝運の神として、足利尊氏、赤松正則、松田元成、宇喜多直家・秀家、池田光政など多数の参詣の記録が残されており、備前国四大神社の一社に数えられた由緒正しい八幡宮です。境内には全国でも珍しい「三葉の松」が自生しており、葉が金色になってから落葉するため金運の御利益があるとされています。

学問の神・金田天満宮 A-4

明治25年（1892年）7月、夏目金之助（漱石）が訪れたとされる金田地区の氏神様で、金田村の一村一社として地域の天神様として慕われて来ました。学問の神様（菅原道真公）を祀る文学のパワースポットです。

おきた姫伝説・沖田神社 A-4

御祭神は、天照大御神（あまてらすおおみかみ）と素戔嗚尊（すさのおのみこと）です。沖新田の開墾の際に、産土神（うぶすなのかみ）として、元禄7年（1694年）に建立されたと伝えられています。おきた姫は沖新田の干拓工事の際に人柱となり、工事の成功に貢献したとされる女性で本名は「きた」と言われています。

旧備前国一宮・安仁神社 B-5

当初の創立年月日不詳、歴史については、「続日本後記」の承和8年（841年）「安仁神預名神焉」とあるのが初見であり、「延喜式神名帳」に備前国名神大社とあります。縄文晩期、豊かな吉備の地に神武東征の一行は長年逗留し、その縁でこの地に兄貴等の尊霊を鎮祭。従って皇室とも関係が深く「名神大社」「国幣中社」と称され、勅使差遣の社・幣饌料奉納（最近では令和6年（2024年）5月25日）の社。

亀石（かめいわ）神社 B-5

岡山市東区水門町、水門湾入り口に亀の形をした大きな岩があります。この亀石の周囲は3.5m角の玉垣で囲まれており、地元では亀石様として親しまれています。伝説では、神武天皇が東征の時、亀に乗った神様が水門に水先案内をし、その亀が石となった、というお話です。毎年、旧暦6月15日には亀岩宮満潮祭神事が行われます。シャギリ船を巡航、賑やかな郷土のお祭りです。

松中島観音堂（松中島観音寺） A-4

西大寺縁起によると、周防国の皆足姫が大和長谷観音へ観音像とともに向かう途中、備前金岡庄の松中島に一棟の堂を建て観音像を鎮座させました。これが西大寺観音院の起源になったと言われています。

天台宗上寺山餘慶寺 B-3

上寺山餘慶寺は、愛山護法（お山を大切に、仏教の教えを大切にする）の思いを持って、善い行いを積み重ねてきた歴史あるお寺です。報恩大師の開基として伝えられている備前四十八カ寺のひとつで、天平勝宝元年（749年）の開山です。江戸時代には岡山藩主池田氏の庇護のもとで栄えました。現在は6院であり、建ち並ぶ諸堂と合わせ県内屈指の大伽藍と言えるでしょう。

イベント・文化・歴史…観光スポットがいっぱい

西大寺会陽 A-3

毎年2月の第3土曜日、西大寺観音院の境内は1万人近い裸の群れで溢れます。本堂の御福窓から2本の宝木が投下されると、祭りはクライマックスを迎えます。勇壮な争奪戦の末に宝木を獲得した者は福男と呼ばれます。

ロケ地・五福通り A-3

看板建築を含む江戸時代から明治・大正・昭和初期の町並みを今も残す南北300メートルほどの通りに約40件の商家が並び、通称「五福通り」と呼ばれています。昭和5年～11年に西大寺のメイン道路としてバスやトラックを通すために道路を拡幅しました。住民は自主的に道路に面した軒先を切り、数軒は看板建築に改造しました。「ALWAYS三丁目の夕日」他7本の映画・ドラマのロケが行われました。

西大寺文化資料館 A-3

地元百貨店天満屋の創業150周年を記念して整備された創業家旧本宅の衣裳蔵を借用して昭和54年（1979年）に開館しました。郷土史研究グループの西大寺愛郷会が運営しており、日本遺産構成文化財や西大寺会陽などの資料を常設展示しています。

明治の旧家・松島屋 A-3 裏面左下拡大図内

明治40年（1907年）に建てられた典型的な町屋づくりの商家です。文久3年（1863年）に西大寺観音院の本堂を建てた時岡大工の子孫が建てました。明治の末期の建物としては古い町屋様式で、店の中央に大戸が使われているのが特徴です。柱・梁・石など、ごつい材料が使われています。石畳や柱の土台に使われているのは犬島石で、この建物の建築費の3,000円の内、1/3の1,000円が石代でした。軒切りでは単に軒を切るのではなく、軒先の壁面を梁ごと奥に引いています。

備前長船刀剣博物館・上杉謙信公の愛刀「山鳥毛」 B-1

山間部の豊かな鉄資源が集積した長船（瀬戸内市）の日本刀は評価が高く、国宝の半数を占めています。この博物館は世界的に見ても珍しい、刀剣専門の博物館です。2020年（令和2年）に国宝の「山鳥毛」が所蔵品に加わり、注目を集めました。

琴松庵（猫庵） A-3

江戸時代、西大寺に住む美女「求女（もとめ）」が、奉公先の京都で嫉妬にかられた怨嗟から幾度も命を狙われるが、その都度、愛猫「月」によって命を救われました。西大寺に戻りついたのを機に出家し、「月」とともに穏やかな日々をここで送ったと伝えられています。

西大寺鉄道（けえべん） A-3

西大寺鉄道は、西大寺市駅（岡山市東区）と後楽園駅（同中区）の間を結んでいた鉄道です。特殊軌間（3フィート軌間）を用いた鉄軌道の中で最後まで残った路線です。地元民には「けえべん」の愛称で親しまれ、昭和37年（1962年）に国鉄赤穂線（伊部～東岡山間）の開通により廃止されました。

両備ホールディングス株式会社提供

高瀬舟で栄えた街・河本町 B-3

旧河本町は、江戸時代に始まった高瀬舟の寄港地として栄え、街道沿いには商店がぎっしりと連なっていることから町家百軒とうたわれていました。

現在でも下屋造りや雁木、白壁に格子窓の町屋が並び、当時の面影を残しています。

豊臣秀吉や宇喜多家ゆかりの地

宇喜多家再興の地・砥石城跡 B-4

「天下人に仕えた宇喜多家の成功ドラマ」豊臣五大老の一人、岡山城初代城主宇喜多秀家公。その父・直家公は砥石城にて夜襲を受け、宇喜多家存続の危機に陥ります。しかし、巧みな戦略や調略により宇喜多家を再興。織田方と毛利方に挟まれた土地ながらも、乱世の世にて出世を遂げた才能に溢れる武将です。天下人の大老にまで登り詰めた宇喜多家の物語はこの砥石城から始まります。

中国大返し・豊国橋 A-3 裏面右上拡大図内

高松城水攻めの後、豊臣軍は本能寺の変に際し「中国大返し」を実行。当地では本隊が山陽道にて京都に向かう一方、秀吉公は西大寺から牛窓経由で海路を選択したと伝えられています。その時に渡ったとされる豊国橋の親柱が、雄神川神社の境内に移築されています。

備前福岡・仲崎邸住宅主屋 B-2

国宝『一遍上人絵伝』に「福岡の市」として登場し、中世から近世において西国一の商業地・宿場町として栄えました。福岡藩の黒田家ゆかりの地であり、福岡県の名の由来となりました。仲崎邸は大地主の邸宅で、国の登録有形文化財です。

備前の古墳

浦間茶臼山古墳 B-1

備前の古墳は2000を超え、前方後円（方）墳は60ほどで他は円墳や方墳。吉備で最古の大型前方後円墳浦間茶臼山古墳（全長138m）は国指定で、卑弥呼の墓といわれる奈良県桜井市箸墓古墳の1/2の相似で畿内との関係が指摘されています。

宮山西塚古墳 B-2

吉井川堤防から約300mの山麓にある宮山西塚古墳は、古墳時代終末期の大型横穴式石室墳。石室は全長13.5mで岡山県下8位の規模で、家形石棺があり、吉井川の水上交通を掌握していた首長の墓と言われています。

西大寺にゆかりのある偉人たち

文学の道・漱石ロード A-4

若き日の文豪夏目漱石や、川柳を文学の高みに押し上げた功労者たる時実新子の足跡などを巡ることができます。そこには漱石ゆかりの地のお宮、学問の神様（菅原道真）を祀る文学のパワースポット金田天満宮があります。

竹久夢二の生家 B-3

大正ロマンの世界を描いた詩画人、竹久夢二が16歳まで過ごした茅葺きの生家には、日本画・素描・版画などが展示され、夢二の少年時代の部屋も残っています。

「少年山荘」は晩年自ら設計し東京に建てた、夢二唯一の建築作品とも言えるアトリエ兼住居を復元したものです。館内では、人生・音楽・デザインをテーマに夢二の作品・遺品などの展示が鑑賞できます。

現代川柳の旗手・時実新子 A-4

上道郡九蟠村（岡山市東区九蟠）出身、昭和62年（1987年）に出版した句集「有夫恋」が女性の情念を表現した作品として話題を呼びベストセラーに。川柳界の与謝野晶子と称され川柳の世界に新しい風を吹き込みました。

2024年（令和6年）に建立された句碑には「手に掬い手からこぼして吉井川」の句が刻まれています。

夏目漱石（金之助） A-4

明治25年（1892年）、大学在学中の夏休み期間に亡き兄の元嫁の小勝の再婚祝いの為に、金田地区を訪問しています。（漱石書簡集記述）金田では、吉井川で鮎釣いをするなど、夏休みを楽しんだ逸話が残されています。

三徳園（小鳥の森）・矢野恒太 B-2

上道郡角山村（現岡山市）生まれ。日本生命に医員（診査医）として就職後、共済生命設立に参加し総支配役に就任。農商務省に勤務し保険業法を起草し、1902年（明治35年）わが国最初の相互会社第一生命を創立しました。のちに郷里上道郡角山村に農業青年教育を目的とする三徳塾を開設し、農民教育の刷新などにも尽力しました。

岡山孤児院の創設・石井十次 B-4

児童福祉制度などなかった明治時代において、児童救済に力を尽くし「児童福祉の父」と呼ばれています。1人の貧しい巡礼者の子を預かったことをきっかけに、医学の道を捨てて児童救済事業を開始。東奔西走しながら資金を集め、教育を施し、手に職を付けさせて子どもたちを自立へと導きました。

ひと足伸ばして犬島へ

菅原道真公と犬石様 B-6

瀬戸内海に浮かぶ周囲約4kmの犬島は、その昔、嵐に遭った菅原道真公が犬の鳴き声を頼りに島にたどり着いた伝説が名前の由来とされています。かつては花崗岩の産出地であり、現在は近代化産業遺産に認定された銅の製錬所跡を再生した犬島精錬所美術館や、集落に点在するギャラリー、犬島「家プロジェクト」などが展開される「アートの島」として注目されています。

西日本最大級・犬島貝塚 B-6

この貝塚は縄文時代早期、今から約一万年前のヤマトシジミで形成されている、西日本最大の貝塚であり、瀬戸内海の生立ちを知ることができる大変貴重な貝塚です。

犬島精錬所美術館 B-6

犬島精錬所美術館は、犬島に残る銅製錬所の遺構を保存・再生した美術館です。太陽や地中熱などの自然エネルギーを利用した環境に負荷を与えない三分一博志の建築と、日本の近代化に警鐘をならした三島由紀夫をモチーフにした柳幸典の作品を公開しています。

犬島精錬所美術館　写真:阿野太一

西大寺の橋、干拓について学ぶ

西川に架かる12橋 A-3 裏面右上拡大図内

西川は当初、江戸時代の寛文12年（1672年）に灌漑用に築造された用水で、吉井川の鴨越堰から取水し、西大寺の市街地を貫流しています。川には趣きのある大小様々な橋が架かり、川べりには情緒ある風景が続いています。

高瀬舟の雁木と水道栓 A-3 裏面右上拡大図内

高瀬舟の荷物の積み降ろしに使われていた石段「雁木（がんぎ）」は、この五福通り付近ではここにしか残っていません。そこに立つ水道柱は大正11年（1922年）4月に上水道が開通した時の物です。備前商都として繁栄した西大寺に県内でも早くから上水道が引かれたことを示しています。

新旧永安橋 A-3

最初の永安橋が架けられたのは明治11年（1878年）です。洪水による流失等あり、昭和7年（1932年）に鋼鉄製の橋に架け替えられ、その赤いアーチの美しい橋は以降54年に渡り市民に親しまれました。モータリゼーションの進展とともに昭和61年（1986年）に現在の新しい橋に生まれ変わりました。

旧永安橋

現永安橋

上南公民館 A-4

昭和44年（1969年）の西大寺市と岡山市の合併を機に「市立公民館建設運動」が盛り上がり、その成果としての上南公民館が設置されました。令和6年（2024年）8月には開館50周年を迎えています。江戸時代に金岡新田・沖新田として干拓された田園地帯の中にあります。

児島湾干拓の歴史

海の水路であった児島湾は、吉井川・旭川が流れ込み干潟が自然にできました。その後、戦国時代の宇喜多堤、江戸時代の津田永忠による沖新田干拓などを経て、昭和38年（1963年）塩害を防ぎ農業用水を確保する締切堤防設置後、干拓事業は完了しました。